



秘境駅とは

秘境駅とは「鉄道以外に到達手段が無く、周囲に民家等が無い駅」と牛山隆信氏は述べ、横見浩彦氏は「駅しか無く、家も無く、降りるだけの駅」と述べている。主に秘境駅の要素として以下のようなものが挙げられている。

- ・ 無人駅
- ・ 利用客僅少
- ・ 周辺人口僅少
- ・ 列車による到達の難しさ（停車本数が少ない）
- ・ 自力到達の難しさ（駅への道が無い、車は乗り入れられない、など）

今回紹介する飯田線の駅では、千代、金野、田本、為栗、中井侍、小和田が秘境駅に挙げられている。事実、秘境駅めぐりと銘打った臨時列車もこれらの駅に停車する。

秘境駅への道のりは遠い　まずは天竜峡へ

辺りの空が少しずつ明るくなってきた午前4時32分、松本駅で夜行列車から降り立った。同行する坂本は極めて眠そうだった。辰野行きの列車まで1時間半近くあるので、改札を出て市内をのんびり歩いた。道なりに進むと、松本城が見えた。堀の周辺は遊歩道が整備され、散歩している人々がちらほら見受けられる。重厚な天守をしばらく眺め、近くのコンビニで朝食を調達し、駅へ戻った。5時56分発の辰野行き普通列車は軽快な塗装の115系で、0番線ホームにすでに停まっていた。パンタグラフが降ろされており、車両はまだ眠っていた。朝食のパンを食べていると、がちゃんという音と共にパンタグラフが上昇した。通電が再開し、引き続き運転士はスイッチ類を操作する。後はドアを開けるだけだが、開閉に使う圧縮空気はエアータンクから完全に抜けてしまっている。圧縮機が起動し、ごとごとと轟音を立てた。ある程度の圧縮空気が溜まったところでようやくドアが開いた。坂本はノートを取り出し、小説の執筆を手伝って欲しいと求めてきた。私は快諾し、眠くあまり働かない頭を無理矢理使いながら、一言一言言葉を選び文章を書いていった。発車時間になり、ドアが閉まり列車は動き出した。足元からは低く唸る音がする。電圧制御に使う抵抗器を冷却するためのブローの動作音である。2両編成の身軽な列車は早朝の中央本線を快走する。塩尻には6時13分に着き、後から来る東京行きのあずさ2号を先に行かせ、20分に発車した。塩尻大門の複雑な線路群を渡り、単線の線路を辰野に向けて進む。

さて、先ほどのあずさ2号のように中央本線の列車は全長5994メートルの塩嶺トンネルを通り、ほぼ直線で岡谷との間を結んでいるが、このルートは1983年開業と比較的新しいものである。中央本線建設当時から、このような塩嶺を貫くルートは考えられていた。しかし、当時の技術レベルでは建設が大変困難な上、蒸気機関車では煤煙による窒息事故の危険性があった。このため、伊那地方出身の代議士、伊藤大八の働きかけもあり、伊那地方への入口となる辰野経由の迂回ルートで建設された。このこともあり、このルートは「大八廻り」と呼ばれ、政治家が鉄道を政治の道具にする「我田引鉄」の伝説の一つとされた。しかし、技術レベルや安全性の問題もこのルートになる大きな要因であったことも忘れてはならない。その後、スピードアップが求められたため1970年代から短絡ルート建設案が浮上、岡谷市内の用地買収に手間取ったものの、1983年に塩嶺トンネル経由の新線が開業した。辰野経由の旧ルートのうち、岡谷～辰野間が飯田線と運行面で一体化され、辰野～塩尻間は切り離された存在となり、荷物電車改造の1両編成の車両が往復するローカル線に転落した。

話を車窓に戻す。列車は次第に山の中を走るようになり、小説が一段落しぼんやりとしていた私は気が付くと眠りに落ち、顔を上げると辰野に着いていた。辰野は中央本線の様々な優等列車が行き交ったが、ルート切り替え後は飯田線直通の急行列車だけになり、その列車も快速列車に格下げされ、3両編成の身軽な列車となった。今の辰野にかつての賑わいは感じられなかった。格下げや停車駅増加を経てもわずかながら残る中央本線直通列車が慰めのために存在しているように思えた。7時05分に天竜峡行き普通列車は発車した。車内を見渡すと、空調やワンマン運転

設備を後付けした関係でやたらと張り出しが多く、ドア付近の整理券発行器は邪魔だった。空調は今ひとつ効きが悪くなく、扇風機併用でないとあまり快適ではなかった。この扇風機は車内に5台ほど装備されているが、それぞれスイッチが壁にあり乗客が任意で操作できる。車窓を眺めると進行方向左側に天竜川が流れ、水を湛えた水田と住宅が入り混じり、精密機械や食品工場もちらほら見られた。景色の変化はあまりなく、しばらく眺めていると飽きてしまった。駒ヶ根を過ぎ、隣町の飯島町に入って最初の駅である田切から少しずつ眠気に襲われ、元善光寺の手前まで眠ってしまった。紀行文を書く上で車窓は重要と考える私にとって、これは失態以外の何ものでもない。ただ乗っているだけである。目覚めた時、車窓について全く書けないことに気づき、あまり気持ちが悪くなかった。まあ眠ってしまって書けないところを埋めるために再び乗りに行くなんてことはしないのだが。ここから伊那上郷～下山村間では、飯田の市街地を通るためか天竜川と離れ、大きく迂回する。迂回の度合いは伊那上郷～下山村間の移動なら人が列車を降りて走っても再び同じ列車に乗れる、とバラエティー番組で紹介されるほどである。伊那八幡付近から再び天竜川が近づき、10時49分に着いた終点の天竜峡では駅のすぐ真横を流れていた。さて、天竜峡から先、平岡、水窪、中部天竜方面への列車は12時52分まで無い。しばらく天竜峡を眺め時間をつぶすことにした。川原に下りると、坂本が砂金を見つけ二人でしばらく砂金集めに夢中になった。天竜川は思ったよりも流れが早く、折角見つけた大きめの砂金も波で流され、たちまち見えなくなった。坂本が水に濡れた靴下を乾かしている間、私はノートを取り出し、小説を書いた。しかし、照りつける灼熱の太陽がもたらす暑さで頭はぼんやりし、あまりはかどらなかつた。靴下がそこそこ乾いたところで、駅に戻り昼食を摂る場所を探すと、すぐに見つかった。中に入ると冷房が効き、中々快適であった。メニューを見ると信州そばやうどん、ラーメンもあり、麺類が中心の店であった。坂本はラーメン、私は肉うどんを食べることにした。当然ながら地元客が多く、天竜峡駅の駅員もスポーツ紙を読みながらうどんを啜っていた。

12時49分、ようやく豊橋行きの列車がやってきた。車両は119系ではなく、快速みすずを中心とした運用に就く313系であった。車内は転換クロスシートで静粛性も高く快適であった。今年から313系が再び増備され、119系は置き換えられる。周囲は次第に山深くなり、崖を削って生み出した狭いスペースに線路を敷いた様子が伺える。落石も多いようで、検知装置がちらほら見られた。訪問対象の千代に到着したが、上下列車を組み合わせ効率良く秘境駅巡りをするため、ここでは降りない。金野に着き、車掌に18きっぷを見せて降りた。列車が最近の車両らしく静かに発車していくと、何も無い寂しさに襲われた。3方の壁と屋根だけの吹きさらしタイプの待合室には駅ノートが置かれ、早速記帳した。壁には時刻表やマナー啓発ポスター、ワンマン運転のお知らせの他に、地元住民によるゴミを捨てないで欲しいという旨の手書きのポスターが張られていた。事前にネットで調べた情報によると、金野集落に近い所に建設しようとしたが、複雑な地形により建設は困難となり、やむを得ず集落から離れたルートに駅を造ることになった。集落からの利用客は少なく、平均利用客を一日平均で示すと限りなくゼロに近い値となる。なお、年間利用客は2007年度のデータで83人である。駅から天竜川を見下ろすと、中州で15人ほどキャンプをしている集団が見られた。ダムの放水が行われると忽ち中州は水没する。幸いにもこの日は放水されることがなかったが、駅前には中州は危険であるという看板が立てられていた。くれぐれも中州でキャンプなどはしないように。増水したら命は無いです...駅に留まっても面白くないので、川に架かる橋まで歩いてみた。橋の欄干は低く、その上プリンを逆さまにしたように裾がすぼまっているため、欄干に寄りかかるのは危険である。私の体型だと腹に欄干が接しテコの原理で頭から落ちる。駅に戻ると坂本が虫を見ては騒いでいた。秘境駅ではのんびり寛げると思っていたが、これは大間違いである。やたらと虫が多く、鬱陶しくて全くもって落ち着かない。待合室には馬鹿でかいカブトムシや同じく馬鹿でかく気持ち悪い虫が居り、拳句の果てには蜂が飛び、ヤモリがホームを這いずり回っていた。小学生の頃は良く虫を捕まえて遊んでいたものだが、今となっては虫を捕まえて遊ぶということは無く虫とは疎遠になってしまった。強いて言うなら家に入ってくるハエや蚊、蜘蛛は捕まえているのだが...ホームの縁に座り、坂本に小説のキャラクターを描いてもらったが、やはり虫が鬱陶しく全く捗らなかった。そうこうする内に天竜峡行きの列車がやって来た。乗り込み、次の訪問対象である千代に向かった。

千代に降り立った。ここでも虫に悩まされた。羽虫がブンブン飛び、蟻は無意味に這いずり回っていた。辺りを少し歩く。周囲にはそこそこ民家があり、秘境駅の条件に若干外れていたが、誰も来ず乗ってこないのが秘境駅と呼べるだろう。ふと見ると、2人の男女が集落からの道を通り、駅をのんびり眺めていた。恐らく車で来たのだろう。その道は舗装され、地図にもきちんと掲載されているが、草木が鬱蒼と茂り街灯も無く、夜間は歩きたくない道であった。くどいようだが、本当に虫が多い。どこへ逃げても必ず虫は居る。ペキッと嫌な音がし足元を見ると虫が私に踏み殺され、蜂やら羽虫やらがブンブン飛び交い、ここでも全くのんびりできなかつた。秘境駅を甘く見た私のせいで坂本は弱ってしまっていた。ようやく落ち着いてきたところで、ホームの縁に腰掛け、小説を書き始めた。一区切りついたところで、坂本はノートを閉じた。立ち上がり、待合室の方を見ると突然騒ぎ出した。クモが糸を引きながらだらりと下がってきたのだ。坂本は虫がとにかく嫌いのような。私はティッシュを取り出し、そのクモを捕まえると握りつぶし線路に捨てた。一応益虫の類だが、葬らせていただく。15時11分、豊橋行きの電車がやってきた。次の目的地は為栗である。先ほど降り立った金野を再び通ったが、そこには千代にやってきた男女と同一人物の人が居た。崖にホームがへばりついている、同じく秘境駅の一つである田本を過ぎ、温田を経て為栗に着いた。

吊り橋と羽虫の為栗

15時36分に為栗に着いた。目の前には天竜川がゆったりと流れ、のんびりとした場所であった。対岸への吊り橋が架かっており、県道430号線に含まれているようだが、車は通行出来ない。喉の渴きを覚え、自販機を探したが周囲には無かった。喫茶店がある旨の看板があり、そこに自販機を求め吊り橋を渡った。橋の中ほどで立ち止まり、ゆさゆさと揺すってみた。ぎいっと嫌な音がしたが、流石にワイヤーが切れることは無かった。山道をしばらく歩く。木々が鬱蒼と茂り、あまり気持ちの良いものではなかった。問題の喫茶店は一向に見えない。幾度か引き返そうかと思ったが、10分強で辿り着いた。が、肝心の店は閉まっていた。しかし、そばには自販機が置かれ、ちょうど親子連れが買いに来ていた。硬貨を入れ、コーヒー牛乳のボタンを押した。がたん、という音とともに品物は出てきた。手を突っ込み、引っ張り出す。そのペットボトルの底面にはなんと、羽虫がびっしり付いていた。冷たい飲み物にありつけた安堵感と羽虫の大量付着による不安感が入り混じりながら、駅への山道を歩いた。途中で坂本が突然笑い始めた。頭がおかしくなった訳ではない。先ほどの自販機で買った時に出てきたポイントカードとおぼしき物の有効期限が2007年だったのだ。駅に戻り、改めて天竜川を眺めのんびりする。虫に悩まされることはあまりなく、落ち着いて過ごせた。簡易的な待合室でのんびりしていると、吊り橋を渡って2人の男女が駅にやってきた。見ると、先ほど千代にやってきた人物と同じだった。彼らは秘境駅を車で巡っているのだろう。16時49分、天竜峡行きに乗り次の訪問対象、田本に向かった。

ヒグラシと崖の田本

飯田線では走行中に車掌が車内を回り、無人駅から乗車した客から運賃を徴収したり、精算の申し出を受けたりする。私が青春18きっぷを見せると、車掌は愛想良く切符を確認し「次、田本で降りますね?」と言った。大正解である。私のように秘境駅をハシゴする旅人が多く、所持している切符から推定できるのだろう。16時57分、田本到着。私と坂本の2人を降ろし、電車は発車した。滞在時間は17時8分の豊橋行きに乗るまでのわずか11分間。やや慌てて駅ノートに記帳し、駅周辺を撮影した。最低限のことを終え、ひぐらしの鳴き声に耳を傾ける。カナカナカナ...という鳴き声を聴き、何故か空恐ろしさを覚えた。やや余裕があり、駅への道を歩いてみた。保線用の側道ではないかと思うような狭く急な階段を登り、トンネルの真上に上がった。田本の集落はここからさらに狭い山道を歩いたところにある。時間が押してきたので、急な階段を手すりにしがみつきながら降り、しばらくしてやってきた豊橋行きの電車に乗り、田本を後にした。

最強の秘境駅、小和田

17時54分、小和田到着。我々を降ろした電車は隣の大嵐へ向けて発車していった。この駅は皇太子妃のご成婚の際、旧姓と同じ字（正確には雅子様の旧姓はおわだと読む）であることもあり恋成就の駅として一時期大いに賑わい、水窪町主催の結婚式も挙げるほどであったが、あくまでも一時的なブームで現在はひっそりとしている。昔は駅前に集落があったが佐久間ダム建設後、周辺は水没し無人地帯となってしまった。幅や段差がばらばらで歩きにくい石積みの階段を下りる。道が二又に分かれ、目の前には廃屋となった製茶工場がある。傍らには立て看板が立てられ、塩沢集落まで徒歩1時間とのことであった。鬱蒼と茂る森の中の一本道を恐る恐る歩く。が、5分ほどで恐怖心に負けて引き返してしまった。徒歩15分の場所にMさん夫婦が住んでおられるそうだが、どこなのかは分からなかった。駅に戻り、駅ノートに記帳を済ませる。パラパラとノートをめくると、前日にも誰かが訪れているようだった。18時半ともなると、いくら真夏とは言え辺りはやや暗い。照明が付かないものかと気になっていると、自動的に点灯した。秘境駅訪問の第一人者、牛山氏のサイトによると、23時半頃に自動的に消灯するそうである。さて、濃厚な時間も終わりに近づいてきた。荷物をまとめ、ホームに出ると辺りは真っ暗であった。19時8分、天竜峡行きの電車が到着。乗り込み、本日最後の訪問対象である中井侍に向かった。

夜闇が支配する 中井侍

19時14分、中井侍到着。14分後に豊橋行きがやってくるので、駅名標撮影、駅ノート記帳など最低限のことを早めにこなしていった。一段高い場所には民家が1軒あり、明かりが点いていた。眼下には天竜川と段々畑の茶畑が広がっているが、この時間帯では良く見えない。明るい時間に再訪しようと思った。待合室の壁には「警察官立寄所」のシールが貼られている。周囲の雰囲気からして、本当に立寄るかは甚だ疑問である。19時28分、豊橋行きの電車がやってきた。乗車し、これにて秘境駅めぐりは終了である。

旅の終わり

電車は淡々と豊橋に向けて走る。揺られながら秘境駅を旅することはどのようなものなのかを改めて考えていた。疲労でまともな答えは出なかったが、簡単に言えば「息抜き」だと思う。灼熱の日差しが降り注ぎ、虫は飛び交い、何も無く、誰も居ない恐怖感に駆られたりするようでは「癒し」ではない。少なくとも癒されたとは思わない。ちょうどいい息抜きにはなったと思う。が、息抜きを求めたところ、それ相応の代償を払うことになった。肌は見事に日焼けし、脚は蚊に刺され、あちこちで腫れて痒みを発していた。しかし、これで良いのだ。いい旅の土産である。時刻表をめくり、新たな旅の計画を練った。小海線の最高地点に行こうか、木次線の出雲坂根の三段スイッチバックを体験しようか、肥薩線の大畑ループに行こうか...魅力溢れる路線が私を呼んでいるようだ。乗りたい路線は山ほどある。無理せず一つ一つ乗り、楽しんでいこうとしよう。さて、電車は21時54分に終点の豊橋に滑り込んだ。簡単な夜食をコンビニで調達し済ませ、安城まで往復し、上り夜行快速ムーンライトながらの到着までの小一時間暇つぶしした。0時13分、ムーンライトながらがやってきた。乗車し検札が済むと私は忽ち眠りに落ちていった。やがて目が覚め、眠気でまともに動かない身体を無理矢理動かし、下車の支度をした。5時05分、東京到着。山手線、京浜東北線ホームへ向かい、我々は新たな旅へと出発した。

何がなんだか...

この紀行文が完結したときには、旅から約3ヶ月が経過しておりました。小和田駅訪問以降の節は記憶を辿るのを最優先したため、メモ帳のような面白味の無い文章となってしまいました。冬の青春18きっぷ発売もさんざん焦らされましたが確定したので、廃止が危ぶまれる三江線や木次線に乗る予定です。その際にはまた紀行文を書こうと思います。

秘境駅への誘い 飯田線編

<http://p.booklog.jp/book/27094>

著者：落花太洋

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/minyonet/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27094>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27094>